

Günther Schlee with Abdullahi A. Shongolo,

Islam & Ethnicity in Northern Kenya & Southern Ethiopia.

Woodbridge: James Currey, 2012, ix+186pp.

Günther Schlee and Abdullahi A. Shongolo,

Pastoralism & Politics in Northern Kenya & Southern Ethiopia.

Woodbridge: James Currey, 2012, ix+179pp.

ないとう なおき
内藤 直樹

はじめに——現代アフリカにおける文化と政治——

Islam and Ethnicity in Northern Kenya and Southern Ethiopia と *Pastoralism and Politics in Northern Kenya and Southern Ethiopia* は、ドイツの人類学者ギュンター・シュレーと北ケニア牧畜社会出身の実務家シヨングロによる共著である。両書はケニア北部とエチオピア南部にかけて広がる牧畜民が暮らす乾燥地域の近現代史を、植民地期以前にさかのぼる地域のローカルな文脈と現代のナショナルな文脈を踏まえつつ活写している。ケニアとエチオピアにおける国家の周縁に位置するこれらの地域においては、とくに1980年代以降に紛争や虐殺が多発した。そしてそれは、「遅れた牧畜民」同士による家畜の略奪戦や民族間の対立として語られてきた。こうしたまなざしは、アフリカで発生した他の内戦・紛争に対するものと同一であろう。両書は対象地域社会で発生した紛争をめぐる非常に緻密な民族誌的記述を基に、アフリカの紛争に対する従来のまなざしに猛省

を促している。

アフリカは世界の諸地域の中でも、多様な民族や言語集団が分布する文化的多様性に富んだ地域である。これらの集団は、長い歴史の中での地理的移動、そして集団間の分離と融合を繰り返しながら形成された。だが異種混交的な特徴を備えていたアフリカの文化は、植民地国家とポストコロニアルな国家による統治の過程で変質した。ウガンダ出身の政治学者マムダーニは、20世紀以降の植民地権力によるアフリカ支配が、それまでの「人種」に代わり「慣習」という概念を採用し、国家法が支配する近代的な都市部から「民族」ごとに存在する複数の慣習法が支配する伝統的な農村部を隔離する「分権化された専制」(decentralized despotism)を行なったことが、アフリカのポストコロニアル国家における国民統合の過程で致命的な桎梏になったことを指摘している[Mamdani 1996, 16-18]。すなわちアフリカのポストコロニアル国家においては、「分権化された専制」によって引き裂かれた「都市部」と「農村部」の、そして農村部における「民族」同士の連帯と再接合のあり方をいかに構想しうるのかが大きな課題である。

実際に、アフリカ諸国の多くが独立以降に経験している紛争や内戦がアフリカの不名誉な代名詞になって久しい。冷戦構造が終結した1990年代以降には多くの内戦や紛争が発生しており、紛争経験国はサハラ以南アフリカ諸国のおよそ半数に上る。たとえば1994年の「フトゥ」による「トゥチ」の虐殺に至るルワンダ内戦、独立以来スーダン北部の「アラブ系」住民と南部の「アフリカ系」住民との間で繰り返されてきた内戦やダルフルにおける虐殺、あるいは植民地期からの長きにわたった南アフリカにおける「人種」間の抑圧や対立、また記憶に新しいところでは2007年のケニア総選挙後に発生した暴力など枚挙にいとまがない。このような近年のアフリカにおける紛争、内戦あるいは虐殺などの暴力現象をみる限り、あたかも「人種」のような生物学的な、あるいは「民族」や「伝統」などの文化的アイデンティティの差異は非常に本質的であり、それを異にする人々同士は共約不可能な対立関係に陥らざるを得ないかのようなものである。マスメディアや政治、あるいはアカデミックな立場からしばしば発信されるこのような言説は、「遅れた文化的慣

習が今なお残存し、市民社会が未成熟なアフリカ国家の悲劇」を表象し続けてきた。

しかしながらアフリカ諸国が経験した暴力現象は、冷戦終結後に新自由主義的な政策再編がグローバルに展開された過程と密接にかかわっている。冷戦の終結は東西の先進国において軍縮と平和をもたらした一方、アフリカなどの世界システム周辺部においては、民間軍事企業などの市場化した暴力の手段を活用することで軍閥など非国家主体が違法なビジネスをグローバルに展開するといった市場の軍事化をもたらした。アフリカにおける冷戦終結以降の暴力現象は、アフリカ社会の「遅れ」というよりも、むしろグローバリゼーションと表裏一体の進展のなかで展開したのである。それゆえ暴力現象の主体が一見したところ文化的なアイデンティティに基づく集団であっても、それをアフリカの未開性や市民社会の未成熟性の証左だと考えることはできない。むしろマムダーニ [2005, 18] は、そのような文化本質主義的な政治的行動の理解のあり方を「文化的語り口」(culture talk) として批判した。文化的語り口は、近代市民社会に属する人々から、遅れた部族主義にとらわれ「近代化する能力がない人々」や、テロリズムを実行し「近代化に抵抗する人々」を分離する。そのうえで国際社会が前者に対して強引な開発的介入を促し、後者に対する軍事的介入を正当化するための論理となっているという [マムダーニ 2005, 19-21]。

たとえば経済学者コリアーは、多くのアフリカの国々が含まれる「最貧国」においては、安全保障とアカウンタビリティという、国家を形成する上で必要な公共財が存在しないなかで形式的な選挙だけ導入しても、新たな権力を正統化するだけで、政治的暴力や内戦が発生するリスクは減らないと指摘している [コリアー 2010]。それは最貧国の多くが「民族国家」(ネーション) としては大きすぎ、「国家」(ステート) としては小さすぎるためであるという [コリアー 2010, 302-303]。すなわち最貧国の多くは多民族的状況のなかで国民統合に失敗しているし、経済的な規模が小さすぎるゆえに十分な公共財の提供を行えない機能不全に陥っているという。こうした状況を打開するためには、国際社会による援助予算の管理、軍事介入の強化によるアカウンタビリティと安全保障の強化が有効であると提案されて

いる [コリアー 2010]。このような提案はさまざまなデータの緻密な分析によるものだが、そこに通底しているのは、マムダーニ [2005] が「文化的語り口」という概念を用いて批判したような、アフリカの国家や人々を無能力化するまなざしである。こうしたまなざしの下で行われる国際援助は、最貧国における経済的再配分の公正化を目的として行われるが、その過程でアフリカ地域社会が育んできた文化や価値観を「遅れたもの」として抑圧し、援助者側の「近代的」な価値観を押しつける可能性がある。そうではなく、アフリカに生きる多様な人々や集団間での経済的な再配分と文化的な承認の間の相克を調停するような国家のあり方が検討されるべきであろう [フレイザー 2003, 47-48]。換言すれば、それは民主国家における文化と政治のポジティブな関係の可能性を追求することにはかならない。このような文化的承認と政治・経済的な再配分の相克を乗り越えるためには、植民地期以前に形成された土地所有システムや地域の環境特性などのローカルな文脈と国家の資源の配分をめぐる政治運動などのナショナルな文脈という二重の文脈 [Mamdani 2009] が交錯しつつ内戦や紛争が発生する機序を明らかにすることが重要であろう。

北東アフリカ牧畜社会における 民族間関係とアイデンティティ

両書が対象としているケニア北部からエチオピア南部にかけての乾燥地域は、ケニアとエチオピア国家の周縁に位置する地域である。この地域の生態学的特徴は、単に降雨量が少ないことではなく、降雨量やそのパターンが大きく変動する点にある。したがってこの地域で営まれてきた牧畜においては、植物と動物間の相互作用よりも、降雨という非生物的な出来事の偶発的な変動の方が、人と家畜の行動パターンをより強く規定していると考えられる [Sandford 1983; Ellis and Swift 1988; Scoones 1996]。

この地域に暮らす牧畜社会の人々は、干ばつや豪雨による気候不順の影響、人や家畜の伝染病の流行、集団間での家畜の略奪などによる被害を断続的に受けてきた。太田 [1998] によれば、このような環境に暮らす東アフリカ牧畜民の生態学的適応戦略は、以下の4つである。①予測がつきにくい気候に

対処するための、放牧地と水資源の共有および高移動性の確保、②周期的／突発的な自然環境の変化に対処するための、生物学的特性や生産性の異なる家畜種の組み合わせ、③略奪・干ばつ・病気の流行などのリスク分散と機動性向上のための家畜群の空間的分割、④自給用食料の安定確保と家畜群損失のリスク対処のための最大家畜群の維持。したがって、東アフリカ牧畜社会の特徴としてよく取り上げられる「ウシ文化複合」(cattle complex) という概念がもたらす「ウシに高い価値を置く専門牧畜民」というイメージとは異なり、ほとんどの牧畜経済はウシだけでなくラクダ、小家畜(ヤギ・ヒツジ)などの他の家畜種や、農耕および狩猟採集といった他の生業経済との間に連続性をもっていた。干ばつや疫病の流行、レイディングなどの結果、家畜群崩壊の危機に直面した牧畜民が農耕民や狩猟採集民になったり、逆に農耕民や狩猟採集民が牧畜民との相互交渉の過程で牧畜民化するといった、牧畜民と非牧畜民間の長期にわたる経済的関係は、東アフリカ牧畜社会の特徴として指摘されてきた([Sobania 1988; Spear and Waller 1993; Spencer 1973; 1998; Waller 1985] など)。

こうした民族間の動的な関係によって、牧畜民のアイデンティティは柔軟なものになっていた。著者のひとりであるシュレーは、1970年代からケニア北部からエチオピア南部にかけて分布する牧畜諸社会の儀礼や社会構造、口承伝承を比較することで、現在のケニアに分布する牧畜民が、どのような分裂や融合の末に形成されたかを、仮説的に再構成した[Schlee 1989]。それによれば東アフリカの牧畜諸社会は干ばつや疫病、紛争などを契機に分裂・離散し、居住地を大きく変更したり、他の生業様式を選択したり、文化すら変えていた。彼は、このような牧畜民の柔軟なアイデンティティのあり方を「動くアイデンティティ」(Identities on the move)と呼んだ。また彼は、民族間に越境的なネットワークが存在することを明らかにした。そしてそれは家畜群喪失の危機に直面した牧畜民が頼る、重要な社会的資源となっていた。このように、この地域の牧畜民は移住や集団の再組織化を容易にする動的な地域社会と、民族や集団を超えた相互扶助や交換を可能にする地域経済網を築き上げ、この両者からなるセイフティネットによって生存上の問題を解決して

きたといえる。

しかしながら、牧畜社会が近代化・グローバル化の波に取り込まれる過程において、牧畜社会がもつ空間的な移動性や社会的な流動性を無視した介入が続けられ、解体される傾向にあった。たとえば19世紀末から東アフリカの植民地化に着手したイギリスはまず、この地域の牧畜民を部族概念によって分類するとともに、牧畜民の遊牧域を固定化し、地域集団間での相互浸透的で自由な往来を制限した。また在来の交易ルートを破壊し、現金取引による市場経済化を推し進めたことにより、牧畜民と行商人との間に培われていた物物交換と信用取引が弱体化した。その結果、この地域の牧畜生活を支えてきた自律的なセイフティネットは脆弱なものとなった。現在、この地域で頻発する民族間の紛争も、このような生態学的、歴史的、人類学的文脈の中で理解される必要がある。

北東アフリカ牧畜社会とイスラーム

*Islam and Ethnicity in Northern Kenya and Southern Ethiopia*は、かつてシュレーが仮説的に検証したプロト・レンディーレ・ソマリ文化複合(Proto Rendille-Somali Complex: PRS)に属する諸民族の現在の民族間関係について考察したものである。本書においてシュレーらは、PRS文化複合における民族生成にイスラームの影響や植民地統治といった非PRS的要素がどのように影響したのかに焦点をあてている。その際、次の4つの時代区分が重要となる。1550年以前のプロト・レンディーレ・ソマリ時代、1550～1920年のボラナの平和(pax borana)時代、1920～63年のパクス・ブリタニカ時代、そして1963年以降の独立以降の時代である。現在のケニア北部に分布するラクダ牧畜民レンディーレとソマリア、エチオピア、ケニアなどに分布する、ソマリ語の基となる言語や暦を共通してもっていたと考えられる集団(プロト・レンディーレ・ソマリ時代)が、16世紀以降に軍事的拡大を始めた現在のエチオピア南部に分布するオロモ系の諸民族と接触、融合、離散を繰り返すなかで(ボラナの平和時代)、多くのPRS文化複合に属していたガブラ・ミーゴなどの集団が、オロモ語を話すようになった一方、レンディーレやガレなどはソマリ系言語を維持してい

た。オロモ系諸民族の中核であるボラナは、ウォル・リビン (*worr libin*) という軍事同盟を組織し、多くの非オロモ系民族がそこに包摂されるに至った。それゆえ現在のオロモ系民族とソマリ系民族の間には、両者の中間的でどちらともつながりをもつさまざまな集団が存在する [Schlee 1989]。ウォル・リビンの傘下にある民族は、拡大を続けていたボラナによる軍事攻撃の対象にはならなかったし、水場や放牧地などの利用も許可されていた。それゆえボラナの平和は、厳しい環境に生きる人々の生存に寄与していたと考えられる。ところが植民地統治期には、「民族」とその境界が画定され、越境的な移動が制限されるようになった。オロモ語を話すボラナやガブラ、サクイエなどがオロモに、そしてソマリは父系出自によって確定されるに至った。しかしながら、ガレなどのソマリ系の出自であるがオロモ語系を話す集団も数多く存在した。こうしたボラナとソマリの中間に位置するアジュランなどの諸集団は、その後の状況に応じてオロモからソマリ、そしてその逆へと帰属を変更する事態が生じている。

ケニア独立の前年である 1962 年に北ケニア全域をカバーする北部辺境州 (Northern Frontier District: NFD) の帰属をめぐる国民投票が行われた。住民投票の結果は、北部辺境州の一部をケニアからソマリアに分離するというものであったが、イギリスとケニアの中央政府に無視された。その結果、ボラナやソマリが分布するこの地域は、ケニア政府による政治的暴力の対象となった。それに対してソマリア政府の支援によるゲリラ戦 (シフタ戦争) が展開されるに至った。こうした政治的暴力、および 1970 年代以降のエリトリアの独立をめぐる内戦やソマリア=エチオピア間で勃発したオガデン戦争 (1977~78 年) も、この地域の民族生成や民族間関係に大きな影響を与えている。

また生態学的な要因も、民族間関係に大きな影響を与えている。この地域にはラクダ牧畜民とウシ牧畜民が混在するが、生態学的ニッチが競合する同じ家畜種を飼養する民族間 (たとえばともにラクダを飼養するレンディーレとガブラ) には資源をめぐる対立的関係、異なる家畜種を飼養する民族間 (たとえばラクダ牧畜民ガブラとウシ牧畜民ボラナ) には友好的関係が成立することが多い。

本書の各章は、いくつかの既刊論文を加筆・修正

したものである。第 1 章は、「ボラナの平和」について検討している。ボラナは独自の暦に基づき周期的に他集団に軍事攻撃を仕掛けるとともに、他集団が領域内を自由に移動することを許さなかった。それは近隣の PRS 文化に属する諸民族にとって、大きな脅威であった。その結果、20 世紀までにレンディーレを除く PRS 文化に属するすべての民族のなかで、ボラナの軍事同盟であるウォル・リビンに属する集団が存在するに至った。それゆえ PRS 文化複合に属する民族のなかでも、ソマリ系の集団とオロモ系の集団が混在する結果に至った。

第 2 章は、PRS 文化複合における民族生成に関する非 PRS 的な要素について検討している。まずレンディーレ文化と、ケニア南部から拡大したマー (マサイ) 系のサンプル文化の言語・文化的類似性を検討し、新たな文化が PRS 文化複合に編入される動態について検討している。そのうえで、この地域に対するイスラームの影響について考察している。この地域のイスラームは 16 世紀と 20 世紀に拡大したが、19 世紀には縮小した。たとえば、現在はイスラームの信者が少ないレンディーレ文化のなかにも、イスラーム的な要素が見受けられる。このように、オロモ系を含めたこの地域の諸集団はイスラームに改宗したり、またそれを捨て去ったりということを繰り返していたと考えられる。

第 3 章は、イスラームやキリスト教の受容が、PRS 文化複合の社会をどのように変化させているのかについて論じている。シフタ戦争による打撃を受けて離散したサクイエ社会の人々の一部が、イスラームという新たな社会=文化システムを核に集団を再構成した。政治的暴力の影響で家畜を失った人々にとって、ラクダ飼養文化を背景とする PRS 文化は無意味になっていたのである。そしてスーフイズムと PRS 文化を融合させた新たな共同体を創出していた。またレンディーレの多くは現在キリスト教を信仰しているが、それはこの地域で事実上国家機能を代行してきた近代化のエージェントとしてのミッションの存在によるところが大きい。したがって現在のソマリ系文化の本質をイスラーム文化とする見方は誤ったものであり、現在のソマリはあくまで PRS 文化複合がイスラームを受容している状態をみているにすぎないという。

第 4 章はケニア東部のワジヤ県の事例を基に、植

民地政府による境界策定が、どのように人々の移動を引き起こしたのかについて検討している。PRS文化複合に属するアジュランには、ソマリ語話者とオロモ語話者の両方が存在する。こうした人々は、一度確定された境界の生態学的コンディションが悪化した場合、オロモ=ソマリの帰属を変化させることで境界を乗り越えようとしてきた。

また第5章は、1991年以降のオロモ解放戦線の影響によって、ガレなどの「ソマリ系」の集団が「オロモ系」に転向した事例を検討している。

このように、この地域におけるオロモ=ソマリ関係は錯綜した関係にあり、そこに属する諸集団は20世紀以降も、ナショナル・グローバルな影響力に対して、帰属を変更させることによって対応していた。

北東アフリカ牧畜社会と国家

しかしながら *Pastoralism and Politics in Northern Kenya and Southern Ethiopia* では、近年のケニア北部においてオロモ=ソマリ間の錯綜した柔軟な関係が、グローバル・ナショナルな影響のなかで均質化・固定化する様が描き出されている。

長らく生産性の低い遅れた活動であると考えられてきた牧畜は、熱帯乾燥地域の環境特性にもっとも適合した高い生産性があることや、人口が急増するアフリカ都市部の食肉生産源として注目されつつある [AU 2010]。この地域の牧畜が高い生産性を維持するためには、限られた資源を平和的に共有するための空間的な移動性や社会的な柔軟性を維持する必要がある。それを支える社会=文化的な基盤のひとつが、前書で検討されたボラナのウォル・リビン関係であった。また人々はオロモ=ソマリの重層的なアイデンティティを使い分けることで、さまざまな状況に対処していた。しかしながら植民地統治期の民族と領域の確定以降、こうした移動性や柔軟性は減少した。さらに冷戦構造が終結した1990年代以降のアフリカにおける複数政党制の導入をはじめとする「民主化」の波は、ケニアにおける固定化した民族の語りを顕在化させたという。とくにケニアの第2代大統領ダニエル・アラップ・モイ時代に政治の民族化と法の軽視が進行した結果、これまで潜在していた政治の民族的次元が1980年代に表面

化・合法化したと指摘している。すなわち Appadurai [1991] のいう (脱) 領土化とは逆に、ケニアにおいてはあるグループが特定の領土に関する権利をもつという民族の領土化が起きているという。本書は、現代ケニアにおける民族の領土化がケニアとエチオピアの牧畜社会に与えた影響について多くの紙幅を割いている。

第1章は、第2代大統領ダニエル・アラップ・モイ政権期に民族の領土化がさらに進行する様について検討している。これまでケニア北部のデゴディアとアジュランを文化的に識別することは困難だった。しかしながら、1984年になるとアジュランとデゴディア間での家畜の略奪や暴力の応酬が繰り返られるようになった。それは、ソマリアの政治的混乱を契機とする民族移動による家畜と人口の増大が原因であるという。また、この時期にケニア=エチオピア国境に位置するモヤレ県において民族間紛争が激化した。その背景には当時エチオピアから移動してきたオロモ解放戦線をめぐるエチオピア政府とケニア政府の政治的駆け引きが大きく影響していたという。このように、牧畜民同士のローカルな紛争の背景に、ナショナルな力が強く影響していることが指摘されている。

また第2章では、2002年以降のムワイ・キバキ政権期に、民族の領土化がさらに進行する過程およびその結果生じた紛争の実態が報告されている。1990年代後半以降に、他集団を自らの領域から排除する排他的領域性が進行した。その結果、ケニア北部の各地で民族浄化が始まったとの指摘がなされている。共著者であるシヨンゴロ氏の親族を含む多くの人々が虐殺の対象となった血なまぐさい経緯が綴られている。こうした排他的領域性が進行した原因として2003年に導入された選挙区開発資金 (Constituency Development Fund: CDF) の影響が指摘されている。CDFは選挙区の開発を目的とした地方分権的な財政配分システムである。政府歳入から交付されたCDFの約70パーセントが210の選挙区で均等に配分され、残りの30パーセントは選挙区ごとの貧困指数によって配分される。選挙区に配分されたCDFの用途は、その選挙区の委員会が決定する。委員会のメンバーは、選挙区の国会議員を中心に、公務員、NGO関係者、地域住民の代表などで構成されている。CDF導入とともに、各選挙区にお

いて民族性に訴えた政治運動が展開された結果、選挙区内のPRS文化圏に属する集団は利益集団として対立を深める事態が生じている。

そして第3章ではCDFの導入などとともによりネイティブ／よそ者意識が醸成された結果、紛争が激化したモヤレ県において、「ソマリ系」集団として、ボラナやガブラなどの「オロモ系」集団と対立していたデゴディアの人々を追放する声明が出された過程を描写している。2000年4月12日に出された「モヤレ県先住民コミュニティ宣言」は、この地域が「オロモ系先住民」の領域であり、そこから「ソマリ系」のニューカマーが出て行くことを求めるものであった。しかしながら、これまでのPRS文化複合に関する議論を思い起こせば、こうした言説の性質について理解できるだろう。国連は1995年から2004年までを先住民の10年と定めるなど、先住民言説は国際的な力をもっている。モヤレ県の人々は、こうした言説を用いることで、特定の人々を領域から排除しようとしていたのである。

第4章では、これまで検討してきたPRS文化複合に属する牧畜諸社会の将来像について考察している。PRS文化複合は、この地域の不安定な環境に適應するために不可欠の空間的な移動性や社会的な柔軟性の維持に貢献してきた社会=文化システムであった。しかしながら、近年のケニアにおける民族の領域化のなかで、同質化された民族間でさまざまな資源をめぐる熾烈な争いが繰り返されることになった。ここでシュレーが指摘している興味深い点は、対立を生み出すのは牧畜民出身の教育を受けた「市民」である一方で、実際に虐殺に関わり血を流すのは教育を受けていない「牧畜民」であるという点である。しかしながら、現在のケニア北部やエチオピア南部という国家の周縁において、牧畜に必要な社会関係や生態学的知識を学ぶことと近代教育を享受することは両立し得ない。なぜなら牧畜民の集落から離れた町に存在する寄宿制の学校に通う子供は、もはや牧畜に関する知識を得ることができず、村に残った牧童は近代教育を享受することができないからである。このように近代教育から排除された牧畜民は、そのことを通じて市場や政治からも排除されているというのである。そのためにシュレーは、発展著しいIT技術を駆使したモバイル教育の導入によって、近代教育を受けた牧畜民を育てること

で、市場や政治への十分な参加を促すことを提唱している。そのことで「牧畜民」の真の意味での民主化を達成することこそが、この地域における高いポテンシャルを秘めた牧畜という生業の発展と紛争の現象を促すことにつながる可能性を指摘して本書を締めくくっている。

おわりに

両書は、ケニア北部からエチオピア南部に分布する牧畜諸社会の500年間にわたる動態を丹念に追ってきた著者が、その知見を基に近年この地域で頻発する紛争の実態やその発生機序を、植民地以前にさかのぼる文化=社会システムや地域の環境特性などのローカルな文脈および国家の資源の配分をめぐる政治運動などのナショナルな文脈という二重の文脈のなかで理解しようとする労作である。その意味では、一地域を対象にした民族誌的記述を超えて、現代アフリカにおける地域紛争を理解するための試みのひとつとしても読まれるべき著作である。随所にみられる紛争や対立の激化に関する描写も、牧畜民出身の共著者による「内側からの視点」によって非常に生々しく描かれている。これらを通読することで、「遅れた牧畜民」同士による家畜の略奪戦や民族間対立という理解が根本的に誤っていることが明らかになるだろう。また紛争の根本的解決のためには、「教育を受けた牧畜民」の育成による牧畜民の民主化が必要であるという著者の主張についても、そのための具体的方法についてさらに検討する必要があるものの首肯できる。しかしながら、とくに既刊論文から再構成された *Islam and Ethnicity in Northern Kenya and Southern Ethiopia* は、一冊の著作としてみた場合、論理の一貫性にやや欠けるという点、そして民族誌的記述が豊富であるものの、それらが意味するところが北東アフリカを対象とする研究者以外にはわかりづらいであろう点が惜しまれる。また、*Pastoralism and Politics in Northern Kenya and Southern Ethiopia* においては、ケニアの中央政治の展開とケニアあるいはケニア北部における排他的領域性の進展との間の具体的なつながりについての記述がみられない点に不満が残る。しかしながら、それらについても両書がアフリカで頻発する地域紛争を理解するために示した方法論的可能性を根

本的に損なうものではないだろう。

文献リスト

〈日本語文献〉

太田至 1998. 「アフリカの牧畜民社会における開発援助と社会変容」高村泰雄・重田真義編『アフリカ農業の諸問題』京都大学学術出版会.

コリアー, ポール 2010. 『民主主義がアフリカ経済を殺す——最底辺の10億人の国で起きている真実——』甘糟智子訳 日経BP社 (Collier, P., *Wars, Guns, and Votes: Democracy in Dangerous Place*, New York: Harper Collins, 2009).

フレイザー, ナンシー 2003. 『中断された正義——「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察——』仲正昌樹訳 お茶の水書房 (Fraser, N., *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, London: Routledge, 1996).

マムダーニ, マフムード 2005. 『アメリカン・ジハード——連鎖するテロのルーツ——』越智道雄訳 岩波書店 (Mamdani, M., *Good Muslim Bad Muslim: America, the Cold War, and the Roots of Terror*, New York: Pantheon, 2004).

〈英語文献〉

African Union (AU) 2010. *Policy Framework for Pastoralism in Africa: Securing, Protecting and Improving the Lives, Livelihoods and Rights of Pastoralist Communities*. Addis Ababa: Department of Rural Economy and Agriculture.

Appadurai, Arjun 1991. "Global Ethnoscapes: Notes and Queries for a Transnational Anthropology." in

Recapturing Anthropology: Working in the Present. ed. Richard G. Fox. Santa Fe, N. M.: School of American Research Press.

Ellis, J. E. and D. M. Swift 1988. "Stability of African Pastoral Ecosystems." *Range Management* 41: 450-59.

Mamdani, M. 1996. *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late Colonialism*. Princeton: Princeton University Press.

——— 2009. *Saviors and Survivors: Darfur, Politics, and the War on Terror*. New York: Pantheon Books.

Sandford, S. 1983. *Management of Pastoral Development in the Third World*. Chichester: Wiley.

Schlee, G. 1989. *Identities on the Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*. Manchester: Manchester University Press.

Scoones, I. 1996. *Living with Uncertainty: New Directions in Pastoral Development in Africa*. London: Intermediate Technology Publications.

Sobania, N. W. 1988. "Fishermen Herders: Subsistence, Survival and Cultural Change in Northern Kenya." *Journal of African History* 29: 41-56.

Spear, T. & R. Waller eds. 1993. *Being Maasai: Ethnicity and Identity in East Africa*. London: James Currey.

Spencer, P. 1973. *Nomads in Alliance: Symbiosis and Growth among the Rendille and Samburu of Kenya*. London: Oxford University Press.

——— 1998. *The Pastoral Continuum: The Marginalization of Tradition in East Africa*. Oxford: Clarendon Press.

Waller, R. D. 1985. "Ecology, Migration and Expansion in East Africa." *African Affairs* 84 (336): 347-70.

(徳島大学総合科学部准教授)